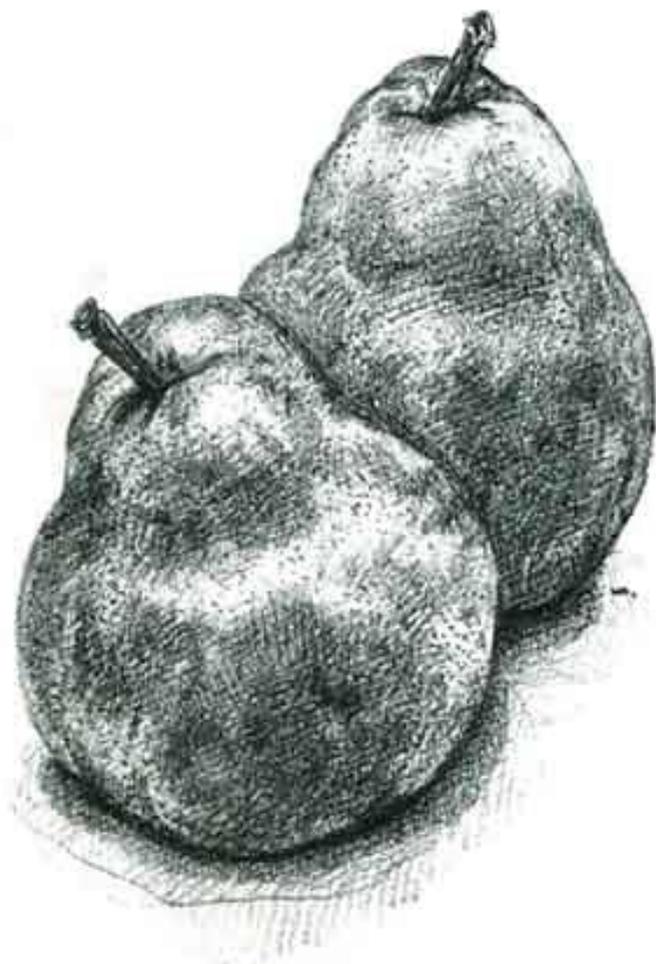


昭和二十二年七月一日創刊（昭和二十二年七月一日創刊）
平成二十二年七月五日發行（昭和二十二年七月五日發行）
第百五十九号（昭和二十二年）

風土



雪 迎 神 蔵 器

た ま き は る 幣 の 風 音 冬 桜

牡 丹 焚 く あ を き 焰ほむら に 狂 ひ た く

子 規 に 一 つ 波 郷 に 一 つ 富 有 柿

翁 忌 や 水 よ り 先 を 水 急 ぐ

真 直 に 十 一 月 の 墓 を 訪 ふ

くわりん匂ふ隣に真鍋呉夫墓地
てのひらに仏いち一人にん小六月
石蹴つて竹に音あり桃青忌
神留守のにはに飼はれて烏骨鶏
桂郎と枯蠟螂の瞳めと会へり
手をつきし石も仏や龍の玉
みちのくのそこぬけ晴れや雪迎



竹間集

同人作品



秋
ゆ
く

齊藤小夜

開門落葉多し僧ひとり
越後より届く新米掌にぬくし
秋の蝶立ちつくばひに羽休め
盆箆に山栗ひろげ縁におく
南蛮漬は片口いわし秋夕日
焼き茄子に手作り味噌を添へやらむ
清風名月を払ふ刻たつを忘れ

良
夜

宮川みね子

海に出る川鱚雲ひろごれり
雁や汐木のからぶ御幸浜
山紅葉雲の下ゆく雲はやし
鳥渡る仏壇の酒買ひにゆく
冷やかや水面に鯉の背鱗立て
秋の夜や仏頭のごとくわりん置き
仏壇を閉め忘れたる良夜かな

逝く秋の

浜
福恵

田仕舞の屋敷荒神灯さるる
枇杷咲くや二条左近の墓近く
台風一過皮剥白く干されたる
遊子の浦の人は疎らに榎櫃の実
秋烏賊の釣場岬の鼻濡れて
蒼蒼の御神島や鯿飛べり
近く秋の潮目に泛ぶ虹の色

かまきり

鈴木とおる

リハビリのバスより釣瓶落しかな
家じゆうの虫と灯火を親しめり
亡き人と同じ日向に秋日和
へりコプター空かきまぜて昼の月
立たされて木の実両手に二年生
迫り上る寺の茅場に野紺菊
かまきりの畳の上に立ち上り

新豆腐

外川 玲子

一病を經し晩年や新豆腐
ひつそりと露の野に置く一句かな
遠くみてところ近づく曼珠沙華
ゆきあひの空はぐれ来し赤とんぼ
いてふ落葉踏んで来し径ふり返る
山粧ふ山に水音細くあり
一年のしづかに熟し冬に入る

天高し

山田 暢子

一湾のごとく湖秋落暉
対岸も灯の点りけり土瓶蒸し
障子開け湖の広さをひきよする
水澄むをたしかめに来し浮御堂
「末吉」と出たるも秋思館山寺
秋惜しむ鳶の空を仰ぎては
昨日より今日より明日天高し

菊の香

門伝 史会

樽出荘一句
誌齡祝ぐ庭に十月桜咲く
菊の香や賀の乾杯に華やげり
ゴンドラの駅ひき人れし大花野
しんがりはつかず離れず鳥渡る
紅葉狩りランチタイムのカンツオーネ
色鳥や揃ひのブローチ友とつけ
句集「ひよんの笛」上巻に題る。
温かき言葉やひよんの笛を吹く

冬のはなわらび

— 岩木 茂 —

桂郎の菊をくららに明史にも
藤棚の実が頭に触るる桂郎忌
碑の歲月ふゆのはなわらび
昭道の墓を高みに落葉搔
霧襖鴉の声が木霊して
笑へば胞子こぼるる冬の花わらび
流木のうつすら白き秋の暮
波の華海が大樹に見えきたる
目貼して海の呻きを聴く夜かな
煮凝りや暈に響く日本海

山河集

同人作品



神蔵
器選

くわんおんに千のてのひら冬桜
十六夜や畦つらぬきて土竜の徑
蓮の実の飛んで子どもに戻りたし
鈴生りの柿の日向の撓ひをり

子規庵

「をととひのへちまの水」の満ちてをり

曼珠沙華咲くや去來の寺の前
番傘の骨干してをり小六月
秋しぐれ叡山淡くなりけり
うす紅葉覆ふ神護寺二天門
もみぢ寺下乗石より三百段

西村 雪園

河幅に空を流して秋澄めり
『ひよんの笛』ゴッホの色に良夜かな

井上 あい

蔵一つ代々守り金木犀
同行の二人に釣瓶落しかな
枝豆の飛んで話のときれけり

牧閉ざす北緯四十度雪置きぬ

石崎 浄

野菊坂弓手に廢寺右手に谿
北限の海女の方言草の実飛ぶ
湯浴女に紅葉の風の配らるる
芒野は大地のたて髪月つつむ

大地より空より秋の来たりけり
針千本飲ます指切り鳥渡る
草千里吹き傾けて初しぐれ
稲刈つて夕日大きくなりにけり
句座戻る一人に月の大きくて

高村 合子

風土賞作品

十一月の風

林 いづみ

扇風機いらずの風が後山より
三伏の二胡の音色に夜が来し
風鈴市風に死角のありにけり
薄墨の笛ひびきけり一葉落つ
藪からし昆虫博士は一年生
身飯田龍太展に入むや巨きかひなの中に入る
隣家まで十歩露けき草の丈
冬に入る五重塔の心柱



香煙や十一月の風乾く
淑氣満つ古墨の罇のこまやかに
福寿草水の振れるひとところ
蹲踞の一滴一滴春を待つ
亀鳴くや心経二百六十二
百年の土間の減りぐせ冴返る
春暁や鎮痛剤のさくらいろ
三回忌春告鳥の来てをりぬ
県境の逃水韋駄天走りかな
巻き戻す月日ありけり夕ざくら
西施てふ蓮の浮葉のかぐはしく
桜桃忌蒼き時間の中にかな

新人賞作品

枯木星

豎山道助

啓蟄やゼロから始めやうと思ふ
春泥を踏めば膨らむ金閣寺
西行忌赤きジャガーの疾走す
春北風や明日判決の靴磨く
心臓はひとりにつチューリップ
汝等の虚子忌我等の啄木忌
桂郎の三寒波郷の四温かな
春愁を積みては降ろすエレベーター



オペラ座の天井棧敷修司の忌
4・3・2・1・0 発射鳥雲に
天平の色を染めたる花菜漬
夏兆す書架に『コンドラチェフの波』
炎天や血を売りし手がコツペ買ふ
あの世まで泳いで行つてしまひけり
炎熱や草田男に会ふ下駄を拭く
月球儀十指に余る十三夜
『キタ・セクスアリス』丸めて蚊を叩く
青野原老師未完の旅に発つ
身のうちに鋼三片十二月
枯木星神は一人にて足りる

◇特別作品◇(抄)

きび畑

佐山 五稜

秋 簾 陰 から 闘 牛 出 陣 す
来 し 方 を 見 つ め る 真 夜 の 霧 笛 かな
声 高 に 女 踏 み ゆ く ほ た る 草
徘 徊 の 母 を 捜 せ し 虫 の 秋
ゼ 口 戦 の 幻 影 よ ぎ る き び 畑
宵 闇 の 少 女 化 粧 に 余 念 な し
け ふ も ま た 今日 に 乾 杯 新 走
清 貧 の 国 は 遙 かに 紅 葉 散 る
酔 茎 漬 つ け 終 へ 母 は 入 院 す
御 火 焚 や 奥 に 奥 ある 京 の 家

風土独語／神蔵器



くわんおんに千のてのひら冬桜
「をととひのへちまの水」の満ちてをり

池田 光子
”

大変珍しいことだが、本号「鳥啼抄」に同一作者の句を二句採り上げた。

前句では「千のてのひら」に注目した。千は無量の義、円満の義で、「千手」は慈悲の廣大無辺の意である。したがって「手」や「臂」(うで・ひじ・かいな)で、仏の慈悲の深さ、観自在の大きさを表わすには「千手」であり「千臂」でなければならぬのかも知れないが、私は小人のかなしさ、「てのひら」により直接的親しさ、あたたかさ、やさしい愛情を感じるのである。

学生時代といつても、入学したばかりの一年生、たまたま話が親鸞におよんだ時、「純粹な愛とは何か」を問われ「母の愛です」と答えて満座の嘲笑を買ってしまった。あの時の恥ずかしさは忘れられないが、今となってはなつかしい。

後句、「風土」五十周年祝賀会に出席するため上京した関西方面の方々は、前日、根岸の子規庵を尋ねたようである。子規の絶筆三句は、碧梧桐の「君の絶筆」によれば、

明治三十五年九月十八日の午前、妹律などに助けを借りて、

画板に貼った唐紙に真中に「糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな」と書き、その右側に「をととひのへちまの水も取らざりき」、左側に「疾一斗糸瓜の水も間にあはず」と書いた。三句を書き終へ筆を投げ捨てるやうに置いた。その筆の穂先が白い寝床の上へ少しばかり墨の痕をつけた。とある。この日のうちに昏睡状態に陥り、翌十九日午前一時、子規はかえらぬ人となった。

子規庵では毎年糸瓜の苗を育て、六畳の病間の前、濡縁にかぶさるやうに棚が作られ、忌日の頃には見事な糸瓜が何本も古いガラス障子に影を落していた。糸瓜の水の「満ちてをり」に、またあらたな悲しみに胸がしめつけられた。

「ひよんの笛」ゴッホの色に良夜かな 井上 あい

問題は「ゴッホの色」である。

ゴッホは三十七年の短い生涯を病氣と貧困、不幸が続き、絶望的な孤独のうちに世を去った。そんなゴッホであったが、三十五歳の時、南仏アルルの太陽に満ちた明るい風景は彼を狂喜させた。ゴッホのパレットからは、それまでの暗い色が無くなり、明るく輝く赤・青、ことに黄の色にあふれた。「ひまわり」「花ざかりの菜園」「アルルのはね橋」「巴巨杏の花」など多くの傑作が生れた。

しかし、この幸せな平穏も長くは続かなかつた。弟テオの紹介したゴーガンとは意気投合したちまちま親しくなるが、一ヶ月もすると色々と口論が絶えなくなり、錯乱の果、自分の左耳を切り落

すといった事件を起し、ゴーガンも彼から去ってしまった。彼はまた孤独になり、強い発作に襲われるようになった。しかし絵はそれまでより力強く、暗く、おそろしいまでの迫力があつた。「糸杉」や「麦畑」など、これはゴッホの純粹な詩精神の発露と受け取りながら、なお鬼気感すら覚える。一方、このような絶望的な中でも「糸杉と星の道」、また、レンブラントの「ラザロの復活」を模写し、原画にはない巨大な太陽を描きいれているという。

もはや正常な精神を失つていたのかも知れないが、ゴッホが自身の胸にピストルをあて引金をひく時、ゴッホの目裏には明るい太陽に満ちたアルルの幸せそうな美しい風景が見え、一瞬、黄の光が充ちあふれて静かに消えて行ったのではなからうか。

風土集



神蔵 器選

枯れ初むる野を弔問の漢かな 横浜 中村 洋子

磴一段一段殖ゆる鱗雲

膝抜けのGパン歩く秋の苑

糸のころに隠れて水の迅さかな

蘆刈女去んで川幅残りけり

東京は根岸二丁目柿日和 高槻 浅田 光代

秋の日のあまねく沁みて子規の部屋

子規庵の抜けどころなき秋の風

鬼の子に追伸長き母の文

秋うらら金太郎飴に子規の顔

駅で別れ秋風橋の上で別れ 東京 柴田 久子

天心の孤高の月となりにけり

惑星をぶら下げて月傾きぬ

虚空にてひとひるがへり木の葉落つ

同巻を終えて

病む友や亡くなりし友鱗雲

初均すごとく太陽均したり 秋田 工藤ミネ子

稲刈りて空知の空の耀けり

つつましく日を拾ふごと落穂拾ふ

ムツクリのはるかな音色霜の朝

ムツクリは「曇ること」

軒下の雨粒美しき今朝の冬 大和 落合 絹代

フルートは天使の音色冬薔薇

草の花雫のままに折り呉れし

草の実やジョン・レノン来し雨のカフェ

十六夜芯の尽きたる絵蠟燭

点滅の止まぬ外灯蚯蚓鳴く 東京 柿沼 盟子

九十九折下り来し村の秋祭

木の実降る村社に巨き慰霊塔

電動機鳴り止む釣瓶落しかな